

国語

(古文・漢文を除く)

平成28年10月16日実施

100点満点

医療福祉専門学校

緑生館

平成29年度

- 総合看護学科
 - 理学療法学科・作業療法学科
- 推薦1期・一般1期入学試験問題

[注意事項]

- 1 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 2 この冊子は24ページあります。問題は第1問～第2問まであります。
- 3 ページの脱落や印刷不鮮明な箇所を見つけた場合には、すみやかに申し出て下さい。
- 4 解答用紙の受験番号欄等の記入に当たっては、受験票に記入した内容と同一になるように注意して下さい。提出する前にもう一度間違いがないかどうか確認して下さい。
- 5 解答は必ず指定された解答記入欄にはみ出したり、薄かったりしないようにマークして下さい。たとえば、問題の文中または文末等に **35** の表示のある問いに対する解答は、下の(例)のように解答番号 35 の解答記入欄に正確にマークして下さい。
その際、解答用紙を汚したり曲げたりしないようにして下さい。

(例)

解答番号	解 答 記 入 欄				
35	1	2	3	4	5
	☐	☒	☐	☐	☐

(悪い例)

1	2	3	4	5	
☐	☐	☒	☐	☐	
1	2	3	4	5	
☐	☐	☒	☐	☐	
1	2	3	4	5	
☐	☐	☒	☐	☐	
1	2	3	4	5	
☐	☐	☒	☐	☐	
1	2	3	4	5	
☐	☐	☒	☐	☐	塗り残し
1	2	3	4	5	
☐	☐	☒	☐	☐	はみ出し
1	2	3	4	5	
☐	☐	☒	☐	☐	消し残し

- 6 解答用紙は鉛筆でマークした部分を機械で直接読み取りますから、[注意事項]を正しく守って下さい。とくに、訂正する場合には消しゴムでいねいに消し、消しきずはきれいに取り除いて下さい。

受験番号		氏名	

第1問 次の文章を読んで、後の設問（問1～7）に答えなさい。

志村ふくみの文章に、二月、蕾がつきはじめた紅梅をたくさんもらって色を得る話が出てくる。

「枝を折って見ますと、折口も赤いのです。きよらかな紅がすこしの酸でうるんだような、熟成した梅の果肉の一部にもこんな色をみるがありますが、折口のその紅いろをみたとき、私はその色をこちら側に宿したい思いがしました。咲かずに切りとられた幾千の梅の蕾を私は抱きたいと思いました。」

私がこの部分を読みながら、ああ、志村ふくみのように木を扱い慣れた人でもそういう経験はむしろ珍しいのだな、と思ったのは、紅梅の枝の折口が紅いことにみずみずしい感動をおぼえたことを彼女が告げているからである。というのも、私も同じ経験を最近して、そんなことをとうに知っている人からすれば実に三歳の稚児にも劣るほどのうぶな驚きを知ったからである。

私の家に、人からある時贈られた紅梅の木が一本ある。初夏になるとたくさんの小梅の実をつける。その紅梅の小枝を、二月の半ばのある日、家の者が何かに引っかけて折ってしまったことがある。枝には蕾がいくつつかいていて、そのまま捨て置くには可哀相な気がするから瓶に差そうと言って、手にして上がってきたその一本の小枝が、切口から鮮血をしたたらせていたのである。鮮血をしたたらせている、と思ったのは、しかし血ではなかった。太さ一センチもないほどの切口の、中心から外皮部にかけて、木が真紅に色づいていたのである。⁽¹⁾ 私はそれを見て、思わず眼をそむけた。血だ、と眼が感じたのだ。

次の瞬間、私は、志村ふくみの桜の染の話を思い起こしていた。開花する前の桜の木が、全身で色づいているというあのエピソード

ドを。この時ようやく、私の中で志村さんから聞いていた耳学問の知識が、私自身の経験として確認され、私の中に根づいた。

それから二週間ほどたって、紅梅の花は満開になった。私はその時が来るのを心待ちにしていた。花が満開になった時を見はからって、今度は意識的に一本の小枝を折りとった。折った切口はやはり紅い色をしていた。しかし、紅は紅でも、そこにもう鮮血をしたたらせている痛烈さはなかった。^⑤名残の色香^⑥という言葉を思った

志村ふくみが次のように言っていることは、こういう事実を知って読むと一段と重い意味を感じさせる。

「植物にはすべて周期があつて、機を逸すれば色は出ないのです。たとえば色は出ても、精は出ないのです。花と共に精気は飛び去つてしまい、あざやかな真紅や紫、黄金色の花も、花そのものでは染まりません。

友人が桜の花弁ばかり集めて染めてみたそうですが、それは灰いろがかつたうす緑だったそうです。幹で染めた色が桜色で、花弁で染めた色がうす緑ということは、⁽²⁾自然の周期をあらかじめ伝える暗示にとんだことのように思われます。」

「花」の盛りの色は花そのものからは得られない、花となる以前の時においてそれを奪取⁽⁷⁾しない限り、花盛りの色を手にすることは人間にはできないのだ―この事実は、たとえば世阿弥が能楽における「花」の死活的な重要性を語りつづけてやまなかった。

『風姿花伝』の中で、さまざまな章における花の思想を究極的に要約してみせている一句を思い起こさせる。すなわち、

「秘すれば花なり。秘せずば、花なるべからず。」

「因果の花を知ること、極めなるべし。」

私は世阿弥のこれら深遠な「花」の思想が、実は、劇場に集まっている、時には不法法でさえあつた当時の観客たちをいかにして芸のとりこにしてしまうかをめぐつての、まことになまぐさくも現実的な人心収攬の戦略家でもあつたこと、それゆえに『風姿花伝』は汲⁽¹⁾めども尽きせぬほどの考えるヒントに満ちているのだ、と思つている。そのことについては「色と糸と織りと」を読んで、私が誘われていくのは、そういう古人の片言隻句^⑧にこもっている含蓄ゆたかな思想の方へ、である。

世阿弥は能における「花」を語つて、「珍しさ」ということをたえずきわめて重視した。満開の花を珍しいとするのではない。

むしろ、時節に合いながらも意表をついた花の出現をこそ珍しいとする。それが、世阿弥の芸の戦略⁽³⁾だったし、一般的に言つて私たちも皆そうおもうはずのところである。しかしそれを言うのにも言い方というものがあつた。

たとえば、鬼神の演技において他に及ぶ者がいないほど迫真的な演技をなしうる上手な役者がいるとする。鬼の役ならあの人と万人がただちに思う役者である。世阿弥はそういう役者を最上だとは考えない。鬼以外の能を演ずるだけの技がなく、常に迫真の鬼を演じ観客も鬼が特技の役者と見なして疑われない種類の役者は、どれほど見事に鬼を演じてみても、なるほどさすがにみごとなものだ、と感心はするが、「珍しさ」が決定的に欠けているから、所詮その芸に「花」が感じられないのである。世阿弥は鬼の演技の上乗のものは何かという問題について、こう簡潔に答えている。

I

これもまた、「秘すれば花」の思想のヴァリエーションにほかならない。

世阿弥が「珍しさ」を出すための心得として示す方針は、結局のところ、常住不斷の修業稽古によつて自分のレパートリーを存分にたくさん持つ以外にはないのだ、ということである。⁽⁴⁾ 変哲もない教訓だ。昔も今も、人間の営みにそれほどの違いがあるわけもないので、今でもこの教訓は相変わらず有効だ。

「花とて別にはなきものなり。物数を尽くして工夫を得て、珍しき感を心得るが花なり」

「珍しきと云えばとて、世に無き風体をし出だすにはあるべからず」

つまり、「珍しさ」とは、決して「世に無き」⁽⁵⁾ような突飛な芸境のうちにあるのではないというのである。多年の修業によつて身につけた多種の演目、すなわち「十体」の配列の工夫によつても、「珍しさ」は生み出せる。なぜなら、体得した演目を順に演じていっても、ひとわたり演じ終わるには相当の年月がかかるから、観客は常に目新しさを感じることになるからである。そればかりか、十体を身につけたほどの名人ならば、自分の演目の一つ一つを、上演のたびにさらに工夫していくことができるから、百色にも及ぶ多様な演技者になれるだろう。同一の曲を演ずるのに五年とか三年とかの間をあけることができるから、これまた「珍

しさ」の花を得ることが出来る。そういう意味では、

「ただ花は見る人の心に珍しきが花なり」

とすることが出来るのであって、演者の方がいくら一曲に珍しさを盛るべく凝⁽⁴⁾つてみても仕方がないのである。

「秘すれば花」という思想は、習練に習練をつんだ人の、こちら側からすれば当然の演技だが、その示し方、演出のしかたによって、あちら側の観客にはたえず新鮮で珍しく感じられる、そういう演技の生まれ出る場所を一言で言い切っている思想だということができる。

そのようなはからいを不純だと感じる人もあるかもしれない。しかし世阿弥は観客の心をぜひと演技によって抱きとらねばならない役者だったのだから、こういう戦略を不純とするような傍観者の立場には立たなかった。

志村ふくみの言葉から世阿弥の言葉へ、私は逸脱しすぎただろうか。しかし、「機を逸すれば色は出ないのです。たとえ色は出ても、精ではないのです」という志村さんの一句は、私には世阿弥が説いたところとそれほど別のことを言っていないと思われる。

満開の花の色は秘していた花の色の「精氣」を、大空にむけてらんまん⁽⁵⁾と放散してしまっているのであって、人の眼と心を奪う。鮮血をしたたらせているあの「精氣」ある色は、そこではもう過ぎ去ってしまったのだ。

さて、そのようなことを思ってもう一度先の引用部分をながめてみる。「折口のその紅いろをみたとき、私はその色をこちら側に宿したい思いがしました。咲かずに切りとられた幾千の梅の蕾を私は抱きたいとおもいました」と志村ふくみは書いていた。

枝の折口の色を「こちら側に宿したい思い」という表現、「幾千の梅の蕾を私は抱きしめたいと思いました」という表現は、男には書けない種類のものではなからうか。志村ふくみの筆を借りてここで語っているのは、「女の精氣」ではないのか。

そして、彼女が「抱きたい」⁽⁴⁾と思ったのは、「咲かずに切りとられた」梅の蕾であった。

(大岡 信「言葉の生まれる場所」による)

問1 傍線部(ア)～(オ)と同じ漢字を含むものを、次の各群の中から一つずつ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

1

 ～

5

(ア) 奪取(ダツシユ)

1

- | | |
|--------------|---------------|
| ① 鳥獸のシユリヨウ | ② 古い教えをボクシユする |
| ③ 心掛けがシユシヨウだ | ④ 西洋文化のセツシユ |

(イ) 汲め(クメ)

2

- | | |
|---------------|--------------|
| ① フキユウの名作 | ② 生活にコンキユウする |
| ③ ポンプでキユウスイする | ④ 罪をキユウダンする |

(ウ) 変哲(ヘンテツ)

3

- | | |
|------------|-------------|
| ① センテツの教え | ② 選手をコウテツする |
| ③ 部隊のテツシユウ | ④ 戦術のテツテイ |

(エ) 突飛(トツピ)

4

- | | |
|------------|-------------|
| ① 危険をカイヒする | ② 水のヒマツをあびる |
| ③ 大臣をヒメンする | ④ 取材源のヒトク |

(オ) 凝っ(コッ)

5

- | | |
|-------------|--------------|
| ① 野原にギョウガする | ② フツギヨウの月 |
| ③ 水がギョウコする | ④ ギョウセキが悪化する |

問2 二重傍線部①～③の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の中から一つずつ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

6

8

① 三歳の稚児にも劣るほどのうぶな驚き

6

② 幼い子どもにもかなわないような新鮮な驚愕

③ 幼い子ども以上に感じている目新しい感覚

④ 幼い子どものように敏感に感得する発見

⑤ 幼い子どもさえ感じないような初々しい感動

⑥ 名残の色香

7

⑦ 盛時の華やかさをとどめている花の色や香り

⑧ 昔と同じ華やかさを保ち続けている花の色や香り

⑨ 時節が移っても褪せないでいる花の色や香り

⑩ 伝承通りの華やかさを誇っている花の色や香り

⑪ 片言隻句

8

⑫ 意味深いことわざ

⑬ ちょっとしたことは

⑭ 偉人の名言

⑮ その時の流行語

問3 傍線部(1)「私はそれを見て、思わず眼をそむけた。」とあるが、この部分にうかがえる「私」の気持ちの説明として最も適

当なものを、次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

9

- ① 多くの蕾をつけているのを、折れたからといってそのまま捨ててしまうのは可哀想だと思う気持ち
- ② 紅梅の小枝の切口からあたかも血が出ているように見え、全く予想外で意外だと思う気持ち
- ③ 血を流しているかに見える紅梅の小枝の切口に命あるもののいたみを感じ、痛ましく思う気持ち
- ④ 単なる紅梅だと思っていた小枝の切口に血を見て、余りのことにうろたえ狼狽する気持ち

問4 傍線部(2)「自然の周期をあらかじめ伝える暗示にとんだこと」とあるが、どのようなことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

10

① 自然界の植物には生命の活動が一定期間を置いて繰り返されてその盛時に至るということが具体的な事象でそれとなく示されていること

② 自然界に四季の巡りがあり、すべての植物はそれぞれにとって一番相応しい季節に盛時を迎えることが具体的な事象として現れていること

③ 自然界には一定の摂理があり、すべての植物の活動はその摂理に従うことでしか生き延びることができないことが様々な具体的な現象に現れていること

④ 自然界の植物は発芽してから枯死するまで規則的に繰り返される生命活動があることが現実の様々な現象として示されていること

問5 傍線部(3)「世阿弥の芸の戦略」とあるが、どのようなことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

11

- ① 世阿弥が専門の芸を徹底的に洗練し、最高の極致に達することで観客を芸に引き込もうとする戦略
- ② 世阿弥がごく当たり前の芸を磨き上げて目新しさを工夫することで観客を芸に引き込もうとする戦略
- ③ 世阿弥が多様な芸を身につけることによって全ての技で観客を芸に引き込もうとする戦略
- ④ 世阿弥が得意の技を工夫して他にできないことを披露することで観客を芸に引き込もうとする戦略

問6

本文中の

I

に入る言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

12

- ① 巖^{いわ}に花の咲かんがごとし
- ② 巖に水の流れるがごとし
- ③ 巖の空に逆立つがごとし
- ④ 巖の人を威圧するがごとし

問7 傍線部(4)「彼女が『抱きたい』と思ったのは、『咲かずに切りとられた』梅の蕾であった。」とあるが、この部分にうかがえる筆者の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は 13

- ① 志村さんの梅の蕾に対する思いやりは女性特有のもので、子を孕むことのできる者にしかできないものだと感じている。
- ② 志村さんが梅の蕾を可哀想だと理解を示しているのは植物相手の仕事をする人だけが有する繊細な感覚だと改めて気付いている。
- ③ 志村さんは生きものを育てたいという衝動に駆られており、それは女性が持つ本能の一時的発現であると冷静に判断している。
- ④ 志村さんが女性であるが故に、秘める輝きを發揮できないまま命を絶たれた梅の蕾を心底いとしいものと身近に感じていることを確認している。

第2問 次の文章は、小説「青果の市」の一節である。読んで、後の設問（問8～14）に答えなさい。

築地市場の青果仲買業、定文^{さだぶん}は、家業のため女学校を辞めた八重と弟の恭とで切り盛りしている。しかし、第二次世界大戦下の経済統制のために仲買業は廃止に追い込まれようとしている。

ある日の午後、会社から青果仲買人全部の集合が命ぜられて、恭と八重は事務所に行った。魚市場の仲買問題に口火をきつて、ついに青果にも及んだのである。

「会社二分、仲買三分と利潤を減少すれば、従前通り仲買を認める。」

と農林省から持ち出された案は、到底こちらの肯定する余地がなかった。それでは商売にならないのだ。

「一体どうなるんだ」

「北海道へでも行くよ、俺あ」

わやわやと騒々しく喋る者にも、じつと腕組して考える者にも、同様に途方に暮れた苦悩の色が濃く、やがて返答保留の決議で解散になると、そろそろ立出て三々五々散っていく彼らの後肩はしょんぼりとしていた。

「恭さん、会社はどう見通しを立てているの」

「はつきりした事は言えないが、末次さんに聞いた所では仲買が会社へ合併^{つぎ}されるのではないかと言っている。勿論市場制度は失くして、例えば米屋のように配給機関として全部月給制度式になるのではないかというのだが」

「全部の仲買が会社へ合併はできないでしょう」

「勿論さ、一軒に一人としてまあ三分の一位だろうね、あとは転業するより道はないよ。自由主義が放擲されて統制経済に移行することは、結局競争を抑制することになるから今まで競争そのものであった市場制度が不必要になってきたのは当然だ。ただこ

れだけの規模と組織はやはり利用しないって法はないからなあ」

「市場もすべて機械的に変わるのね、今までは正直いって、この商売儲けたからねえ」と八重は感慨をこめて言った。

「私はどうすれば好いの、私たちは……」

「最低限度の生活を覚悟すれば、みんなどうにかやってゆけるよ。人間の生きるための執着は強いんだ」

姉を慰めたいと思ひ恭は熱心にこう言ったが、黙っている姉の心が悲しく反撥しているのを感じ、日頃図太いくらい心の座った姉だけに、しみじみ姉を哀れに思った。

「僕たちには一緒になって真面目に苦しんでいる仲間があるのだから、お互いに励ましあっていていける、きっと切り抜けられるよ。」

この機会に、市場中の人間が協力し合うのは大切なことだ」

⁽¹⁾ 恭は市場の匂いを懐かしむように橋を渡る所で振向いた。

恭は決して愚痴を言うまいと覚悟していた。愚痴を言っても仕様のないことなのだ。家代々の家業を捨てて、全く違った職業に転業してゆかなくてはならぬ人間がどんなに大勢いることだろう。人も仕事も秩序もすべてが、創り替えられるべき時代の必然なのだ、最善は尽くしても、愚痴を言うのは無駄だと思ふのである。彼はこの流れを感得出来るジェネレーションとして、これから姉に代わってすべての責任を自分が持つべきだと思った。苦難を増すに違いない、これからの自分たち一家の中で、みんなを心から統一し、協力させてゆくことこそ自分の責任だと感じるのである。

その頃から八重は急に毎晩勘定取りに行くことを始めた。万一の場合を予期して、⁽²⁾ 最善を尽くした善後処置をとっておきたいと思ひ、失せた気力に鞭うつ気持であった。どんな商売も現金主義で、物によっては先払いで品物を仕入れる状態の世の中に、仲買ばかりが貸しにするのは詰まらないと思ひ、今のうち商売の続く内でなくては勘定など取れるものではないと、彼女は急にあせ

りだして勘定取りに回った。

彼女が今夜も支度していると、杉雄が戦地の順から来たという絵葉書を見せにきた。八重が手にしてみると、豆粒ほどの字で丹念に書いてある。順らしい温順さが滲むようだった。

―皆さんの寄せ書き今日着きました。一人一人の顔が目には浮かび懐かしく思いました。お元気で何よりです。店はリングの当たりとか、さすが、姉さんだと僕も万歳をやりました。店が巧(う)くいくのは姉さんが頑張り、兄さんが協力されるからでしょう。僕も負けずに元気でやってますから安心してください。当地の寒さは格別ですが、市場で鍛えた身体がものを言います。では又便りします。お父さん初め皆さんの御健勝を祈ります。

今頃になってリングの当たりを祝つてくるとは皮肉だと八重は唇をかんだが、生きてゆく上の苦痛に何故ともなしカツとなった。

「あの頃はよかった。近頃の騒ぎを順ちゃんが知ったらどうだろう」

「新聞なんか送らないほうが好い」

と恭が言った。

「なあに帝国軍人だ、驚くものか。みんな時勢の要求なんだ」

父親はこう言つて、末次の婚礼祝いの水引に名前を書こうとしたが、みんなの視線を感じると照れたらしく筆を擱いた。

「いいか、八重も恭も心配するな、お父さんが付いているぞ。何事もお国のためだ、一億の人民に五千の犠牲くらいがまんするな
あ、あたりきだ」

突然八重がいらした声を張り上げた。

「ああ、そうよそうよ。それならお父さんに養ってもらいましょう」

あまり唐突な変化に、あつけにとられた家中の茫とした表情の中で、
八重はつと手を延ばすと結婚祝いの水引を痙攣的に引き裂いた。⁽²⁾

八重は家を出た。

今晚勘定取りに回らなければならない五軒の方向に道順を考えながら、暗い築地川を銀座に向けて歩き出した。

一時の興奮が去ると、八重はしんと寂しさに襲われた。女の身の愚痴からであろうと反省しながらも、弟のように彼女は市場の運命を理論で割り切ることではできなかった。恭のあきらめのよき、表面の平静さが八重には頼もしくもあったが、また憎かった。⁽³⁾ 男の強靱さに負けるのは口惜しかった。

女の身としてできることならお花を習い、家事にいそしむ娘らしい月日を持ちたいと心の底では思ったこともある。着物一枚満足に縫うこともできない自分を心底哀しいと思ひました。しかし女学校を退いた日から、それらはふつつりあきらめて、自分の逆境に唇を噛みながら働いた時、気持ちの上で卑屈⁽⁴⁾ではあったが、覚悟した目標を持って張りきった。働くことでもなにかにも一応押し切って、仕事に安定を得たとき初めて生きる喜びを素直に感受できたのである。結婚の話があっても大概の場合実際の事情から不可能であり、また自分の身についた客や商売を振切ることが真から惜しかったのだ。それをあえてしてまで嫁ぎたいと思う相手にぶつかったこともなかった。

末次が結婚すると聞いたとき、八重は瞬間己の年齢がはたと胸にきたのであった。同年の男性が妻を娶るという驚き、幼馴染の彼への儚い離愁、何か希望を一つ一つむしりとられていく不安、しかし今までなら彼女はそれらをすぐ気持ちの上で割り切れた。

己の能力が奪われると知った瞬間から、八重は自分の一生を思い、女としての生き方の特殊さを顧みた。自分は娘らしい生き方ではなかった。全く一本立ちの男の生活と同じだった。しかしこうした生き方が、自分の場合間違っていたとは思えなかった。商売に打ち込んで一か八かむしろ冒險する気でやっていくうちに、なんともいえない、頑張った新鮮な生き甲斐を感じてきた年月には、少しの無理もなかったからだ。結婚からも遠のき、結局は家族のための存在におわってしまいかもしれないという不安の起こることがあっても、彼女はそれでよいと思っていた。それほど商売というものが、切っても切れない命となつて八重の心をつらえたのだ。その根深い商売への執着を通して培った生活力は、

「これからどうなるのだろう」

と止めどなく起こる不安な八重の心を、わずかに救う最後の力でもあった。それは叩かれても叩かれても起き上がろうとする、彼女の勝気な気性と粘り強さになっていた。

彼女は川に添って歩きながら、十年の昔を想い出した。まだ十八か十九の小娘の時でさえ、^⑤生活を双肩に担ってあれほどいじらしくも懸命にやり通したではないか。そう思うと八重は、勝気な粘り強い気持ちを取戻し、現在をどうにでもして耐えてゆこうと思った。

あのときは事情が違う、今は、恭と順が一人前になっている。その頼もしさが八重の肩を半分抜いてくれる心地だった。あの子が何とかやってくれるだろう。自分の定文がなくなることとはもうどうしようもない事だが、せめて恭がその伝統を受け⁽⁴⁾継いで生かしてくれるに違いない。たとえ条件がどんなになっても、若い者の必要なこれからの市場に恭だけは踏み止まってくれるだろう。

市場に対する愛情は仲買人全部の心ではないだろうか。あのひとたちもみんなどうかしてこの難関を乗り越えようと必死になっているのだ。子供を抱えた気の毒な^{ヤマイチ}へーのおかみさんもやはり最後の努力をしているだろう。生きるという大きな現実を困難の中でやりとげられるのは、働いている人間の強さに俟^まつよりない。

苦しいのは自分だけではないのだ。いざとなったら女だってなんでもしてみせる。八重は十年の月日に培った、生きる逞しさを心の底に感じた。

⁽⁵⁾春とはいえ冷たい夜気の中で川風に吹かれながら、八重は癖でショールを掻き込み、少し屈みかげんの姿勢で、気ぜわしく歩いて行った。

(芝木 好子「青果の市」より)

問8 傍線部(ア)～(オ)と同じ漢字を含むものを、次の各群の中から一つずつ選んで、番号で答えよ。

解答番号は 14 ～ 18

(ア) 合併

14

① ヘイレツの電池
③ 薬のヘイヨウ

② ヘイボンな作品
④ 話し方がオウヘイ

(イ) 執着

15

① カクシツによる不和
③ シュウカ敵せず

② キョシュウに迷う
④ 仕事のホウシュウ

(ウ) 巧く

16

① 外国の使者のライコウ
③ コウキの肅正

② 手口がコウミョウだ
④ 経済のキョウコウ

(エ) 卑屈

17

① 胃液のブンピ
③ 肉体のヒヘイ

② ヤヒな振舞い
④ 人跡未踏のヒキョウ

(オ) 継いで

18

① 雑誌へのケイサイ
③ 努力をケイチュウする

② ヒツケイの書物
④ 家督をケイショウする

問9 二重傍線部①～③の本文中の意味として最も適当なものを、次の各群の中から一つずつ選んで、番号で答えよ。

解答番号は 19 19 21

① 三々五々散っていく 19

② 整然と立ち去っていく

③ 足の運びを揃えて立ち去る

② 少人数があちこちに離れていく
④ 秩序なくばらばらに去っていく

① 最善を尽くした善後処置 20

② 出来る限りのことをして後始末をつけること

③ やれることをやり、できる限りの対応をすること

② 最適の手段で最高の結果をもたらすこと
④ あらゆることをして窮地を打開すること

① 生活を双肩に担って 21

② 生活の苦渋を味わって

③ 生活の責任を負って

② 生活の重い負担を感じて
④ 生活の疲労に耐えて

問10 傍線部(1)「恭は市場の匂いを懐かしむように橋を渡る所で振向いた。」とあるが、この部分の「恭」の心境の説明として最も

も適当なものを次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

22

① 今まで自分たちの生活を支えた市場制度がなくなるのを嘆く姉に同情し、商売が繁盛していた今までのことを振り返っている。

② 今まで一家を支えてくれた姉の苦勞を思いやりながらも、市場制度の変化は時代の流れで当然で避けられないことだと思っている。

③ 今までの姉の努力にしみじみとありがたいとの思いを抱きつつ、これからは自分が姉の代わりに仕事を担っていこうと決意している。

④ 今までの市場での営みを慕わしく思いながらも、これからは自分が姉に代わって責任を負わなければならないと考えている。

問11 傍線部(2)「八重はつと手を延ばすと結婚祝いの水引を痙攣的に引き裂いた」とあるが、この部分にうかがえる「八重」の気

持ちの説明として最も適当なものを、次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は 23

① 戦争中の統制経済化で何事も思うようにならないのに、末次の結婚を喜んだり、商売の行く末を気楽に考えている父親を不愉快に思う気持ち

② 戦争の影響で市場から仲買業がなくなろうとしているのを理解しないで、国家のためという大義のためにさらなる苦勞を押し付けようとする父に苛立ちを感じる気持ち

③ 戦争のあおりで商いが瀬戸際にあるにもかかわらず、無責任に振る舞う父に反発を感じ、これまでの自分の思いや苦勞をまったくわかってくれないと思う気持ち

④ 戦地に赴いた弟からの便りを嬉しく思い、弟はその便りで商いの成功を喜んでくれているのに、それを否定するかのような父の無神経さをいやだと思う気持ち

問12 傍線部(3)「男の強靱さに負けるのは口惜しかった。」とあるが、「八重」がこのように感じる理由の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

24

① 世の中の変化に対応していくのは若い世代の責任だと考えている恭を頼もしく思いながらも、商いに人生を捧げてきた自分は簡単に割り切ることはできないと思っているから

② 世の中の仕組みが変わっても人間の生活は変わりようがないと考える恭を頼もしく思いつつ、自分本来の生き方ができなくなることを苛立たしく感じているから

③ 世の中の仕組みの変化について理論的に予測している恭を心強く思いながら、自分自身は冷静になれずになくならうとしている市場に深い愛着を感じているから

④ 世の中の変化の方向性を冷静に予測して積極的に適応しようとする恭を信頼しつつも、商いに自分の全てを懸けてきた自分にはまだ弟以上に働ける自信があるから

問13 傍線部(4)「己の能力が奪われると知った瞬間」とあるが、その説明として最も適当なものを次の中から一つ選んで、番号で

答えよ。

解答番号は

25

- ① 商売でしか生かされない自分の力は、経済統制下では発揮できないと気付いた時
- ② 普通の女性として幸せな人生を送ることはできないと自覚した時
- ③ 女性にとって一番大切な結婚が自分から遠のいていくのを痛感した時
- ④ 精魂を傾けてきた商売もできず、また、家庭も持てないことが明白になった時

問14

傍線部(5)「春とはいえ冷たい夜気の中で川風に吹かれながら、八重は癖でショールを搔き込み、少し屈みかげんの姿勢で、気ぜわしく歩いて行つた。」とあるが、この部分の「八重」の心境を説明したものとして最も適当なものを次の中から一つ選び、番号で答えよ。

解答番号は

26

① 末次の結婚の報に接し、自分が結婚しなかったことを残念に思いながらも、今まで打ち込んできた商いを捨てることはできないで、自分にとって商売こそが一番大切なものだと考えている。

② 苦労を重ねてきたこの十年間は自分にとっては大きな自信をもたらしており、家業を捨てなければならない事態になつても、持ち前の勝気な性格や粘り強さによつて、この難局を乗り越えようと考えている。

③ 女性としてお花や裁縫を習い家事を賄うようになりたかったが、家業の事情で思うようにならずに自分の幸は諦めていたが、明確な目標を持つて生きてきたこの十年は誇ることができると考えている。

④ 戦争下の経済統制のため商いが立ち行かなくなろうとしている逆境の中でも、弟の成長や自分の粘り強さを拠りどころとして、目前の困難を乗り越えていこうと考えている。